

# 道白河二がまん

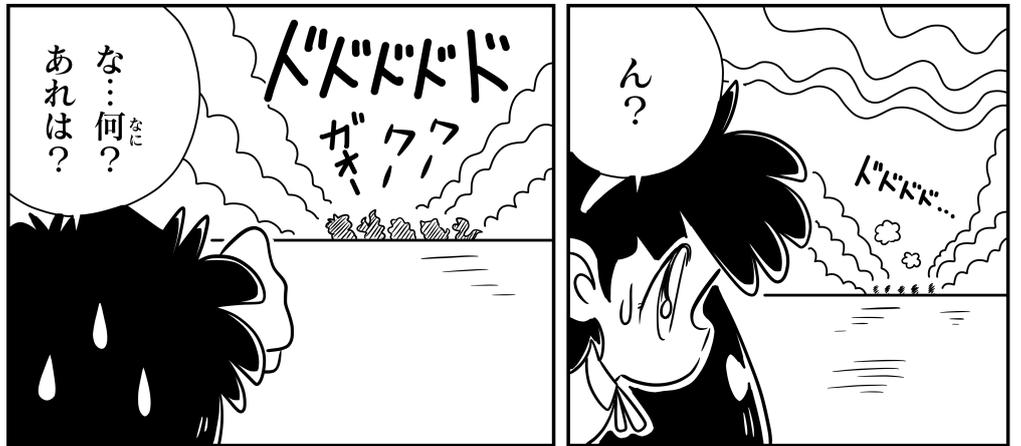
わたし  
私 は み かん  
気 が つ け ば  
ひろい 荒野に  
わたし ひとり  
私 一人 だけ

## 漫画二河白道註

此の人既に空廻の廻かなる処に至るに、更に人物無し。

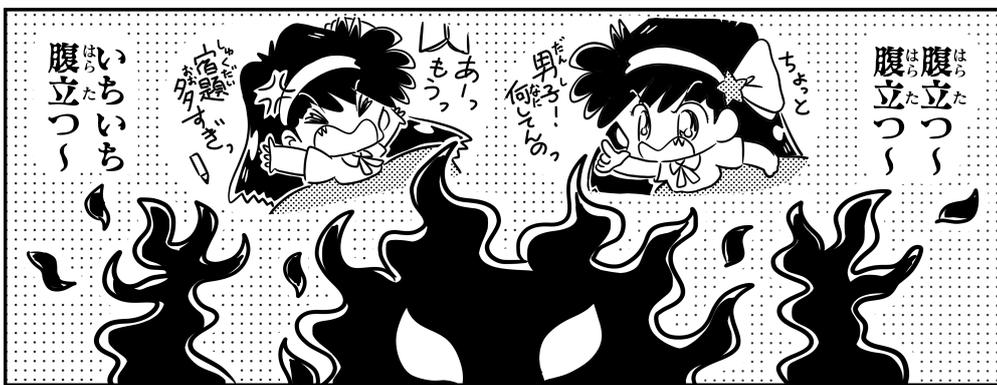
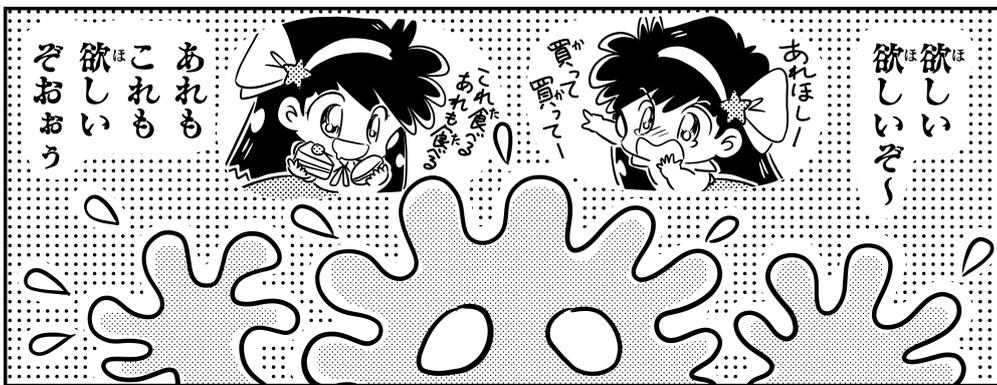
「生死の広路  
曠劫已来常没の処」

(是山和上)



『無人空廻の沢』と言うは、即ち常に悪友に随いて、真の善知識に値わざるに喩うるなり。

「つねに悪友に随ふ」といふは、『悪友』とは、善友に対す、雑毒虚仮の人なり。  
『無人空廻の沢』と言うは、悪友なり。真の善知識に値はざるなり  
『真』の言は仮に対し偽に対す。  
『善知識』とは、悪知識に対するなり。」(二巻鈔)



「一、人の身には眼耳鼻舌耳意の六賊ありて善心をうばふ。これは諸行のことなり。念仏はしからず。仏智の心をうるゆゑに、貪瞋痴の煩悩をば仏の方より刹那に消したまふなり。

ゆゑに貪瞋煩悩中能生清淨願往生心といへり。

正信偈には、譬如日光覆雲霧霧之下明無闇といへり。」(聞書)

多く群賊・悪獸有り、此の人の単独なるを見て、競ひ来つて此の人を殺せんと欲す。

「群賊」とは、別解・別行・異見・異執・悪見・邪心・定散・自力の心なり。

「悪獸」とは、六根・六識・六塵・五陰・四大なり。」(二巻鈔)

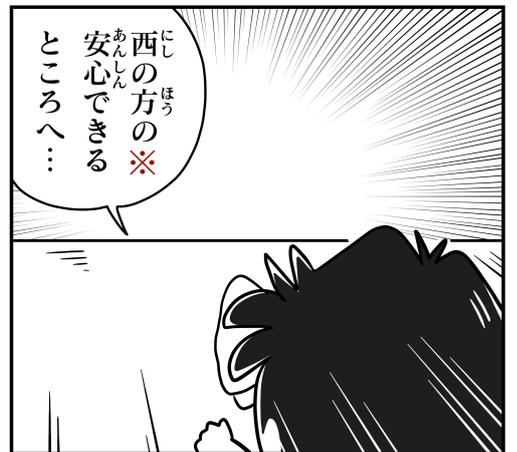
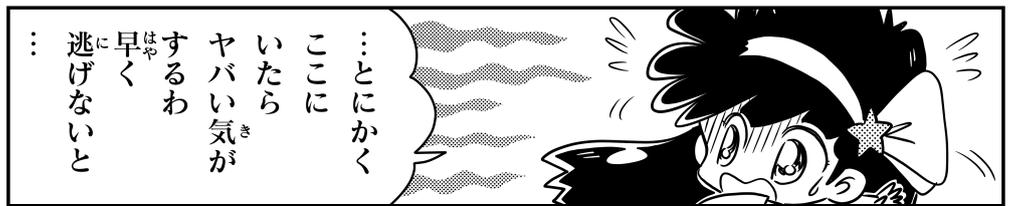
自分及び外人が自己の出離の大事に障害となる

悪獸 自障 ∴ 煩惱、自力  
 群賊 他障 ∴ 外道、聖道

即ち衆生の貪愛は水のごとし、瞋憎は火のごとしと喩うるなり。

「経では煩惱を賊と為し...

今は根境識等の内外一切を指して皆賊の如しと譬ふ」(道振和上)



『群賊・悪獸許り親しむ』と云うは、即ち衆生の六根・六識・六塵・五陰・四大に喩うるなり。

※ずつと仲良くしようぜ

●群賊・悪獸許り親しむ

「六識が六根に依つて六境を縁じて樂着する  
六識が六根に依つて造罪輪廻するを自覚せるによつて欲殺と云う」  
(是山和上)

「下に我等衆無惡心と云ふこれ詐親の相なり」(朝日和上・約他障)

※西の方の安心できるところ  
安養浄土  
安樂仏国

「然るに世の人薄俗にして…心の為に走り使はれて、安き時有ること無し」(大經)

忽然として中路に見れば二河有

一には是火の河、南に在り、  
二には是水の河、北に在り。  
二河各闊さ百歩、各深くして底無し。南北辺無し。

『水火二河』と言つは、  
即ち衆生の貪愛は水のごとし、  
瞋憎は火のごとしと喩うるなり。

※わてらはあんさんでつせ  
「妄念は凡夫の自体なり  
妄念の外に凡夫の心はなきなり」  
(鮮妙和上)



前にも  
水と火がつつ

すいがにが  
水火二河



ちよつと！  
挟み撃ち  
なんて  
ひきよう  
よつ

そんなこと  
言つても  
わてらは  
あんさん  
でつせ



煩惱は  
一生  
とどまらず  
消えず  
絶えないん  
や

※煩惱は一生とどまらず…

「凡夫といふは、無明煩惱われ  
らが身にみちみちて、欲もお  
ほく、いかり、はらだち、そ  
ねみ、ねたむころおほくひ  
まなくして、臨終の一念にい  
たるまでとどまらず、きえず、  
たえずと、水火二河のたとへ  
にあらはれたり。」(一多文意)

あ…真ん中に  
白い道があるわ  
…これを進めば…



な…なんだか  
細くて※  
たよらない道ね…



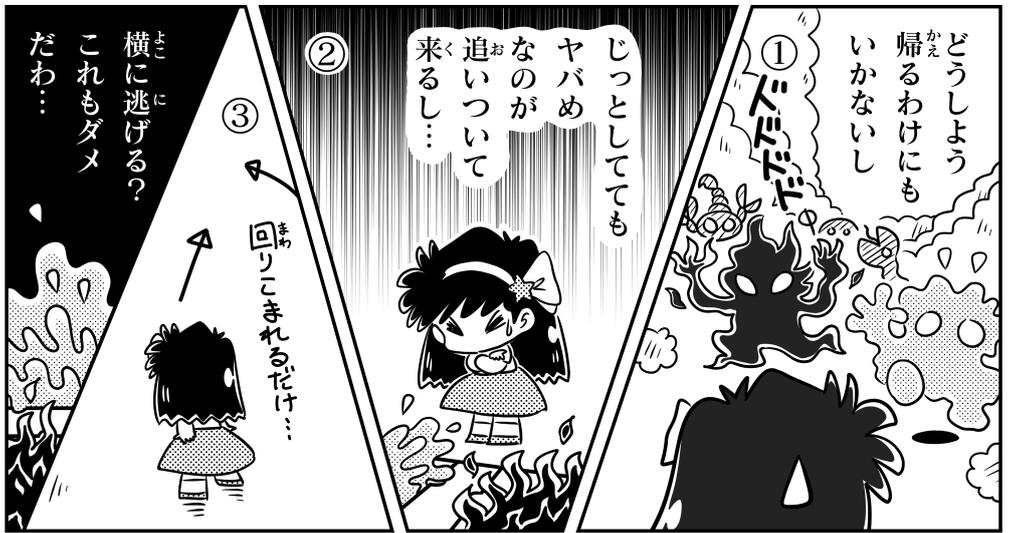
正しく水火の中間に一の白道有  
り。闊さ四五寸ばかりなるべし。  
此の道東の岸より西の岸に至る  
に、亦長さ百歩。  
其の水の波浪交はり過ぎて道を湿  
すに、其の火炎亦来って道を焼  
く。

乃し貪瞋強きに由るが故に、即ち  
『水火』のごとしと喩ふ。  
善心微なるが故に、『白道』のご  
としと喩ふ。  
又『水波常に道を湿す』とは、  
即ち愛心常に起って、能く善心を  
染汚するに喩うるなり。  
又『火炎常に道を焼く』とは、

どうしよう  
帰るわけにも  
いかないし

じっとしてても  
ヤバめ  
なのが  
追いついて  
来るし…

横に逃げるの？  
これもダメ  
だわ…



この道を進むと  
水や火の中に  
落っこちそう…



即ち瞋嫌の心能く功德の法財を焼  
くに喩うるなり。  
※細くてたよらない道  
水火に湿焼せられる  
自力白路の分齊

『路』はすなはちこれ二乗・三  
乗、万善諸行の小路なり。  
『四五寸』といふは衆生の四五大  
陰に喩ふるなり。  
「一切凡小、一切時のうちに、  
貪愛の心つねによく善心を汚し、  
瞋憎の心つねによく法財を焼く。」  
(本典信卷)

忽然として此の大河を見て、  
即ち自ら念言すらく。  
「此の河は南北辺畔を見ず、  
中間に一の白道を見る、極めて是  
狭小なり。  
二の岸相去ること近しと雖も、  
何に由ってか行くべき。  
今日定んで死せんこと疑わず。  
①正しく到り回らんと欲えは群  
賊・悪獸漸漸に來り逼む。  
②正しく南北に避り走らんと欲す  
れば、悪獸・毒虫競い來って我  
に向う。  
③正しく西に向い道を尋ねて去か  
んと欲すれば、  
復恐らくは此の水火の二河に墮せ  
ん」ことを。

時に当って惶怖すること、復言ふべからず。

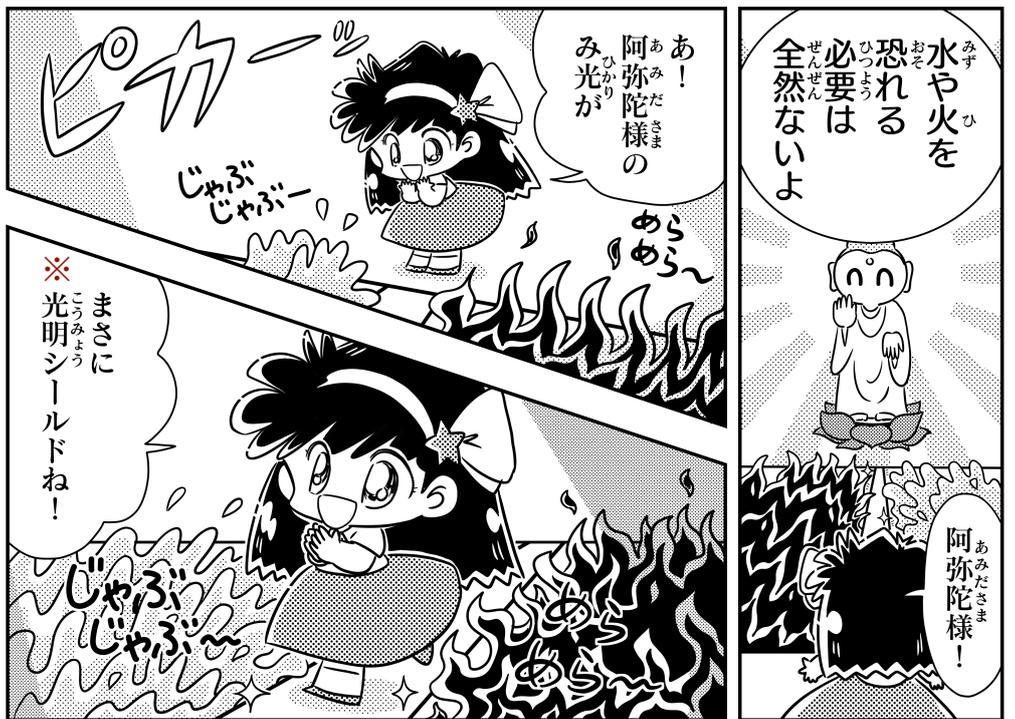
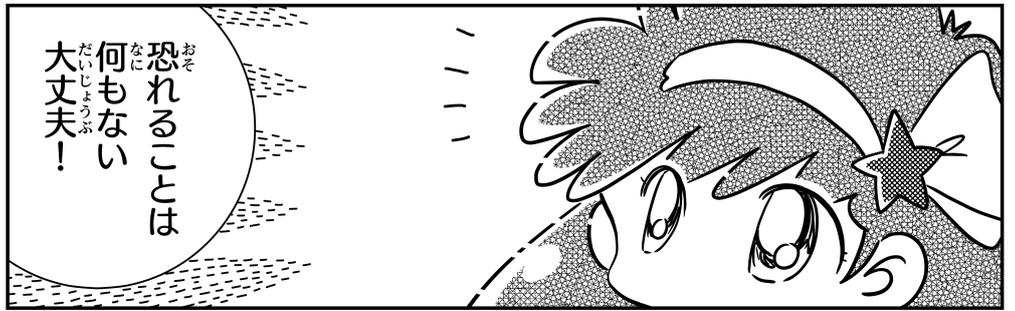
即ち自ら思念すらく。  
 「①我今廻らば亦死せん  
 ②住まらば亦死せん  
 ④去かば亦死せん  
 一種として死を免れざれば、我寧く此の道を尋ねて前に向かいて去かん。既に此の道有り。必ず可度すべし」と。

※今確か四つあつたでしよ？  
 思念の内容が三定死  
 思念と先の念言の内容を  
 合わせて先哲は四定死と云う  
 ※易しそう  
 ・寧く

※よし！決断！  
 ※ぎつと行けるわ！  
 ・必ず度すべし  
 凡夫の必ず  
 強決 確信



※全部ダメじゃん！  
 ※大丈夫かなあ  
 ・惶怖  
 憂慮 不安  
 確信と不安は疑心の表裏  
 ※切りがないわね  
 確信と不安の無限ループ  
 自力心の延長に他力はない  
 「凡夫の心は沙を握るが如し  
 堅めんとしも堅まらず」  
 (履善和上)  
 此の念を作す時  
 三定死の念を作す時  
 しかしこれが獲信の条件  
 というのではない  
 この様に思案していると…  
 といった程度の意味  
 三定死の念の延長に信心はない



此の人既に此に遣わし彼に喚ぶを聞きて、即ち自ら正しく身心に当て、決定して道を探ねて、直に進みて、疑怯退心を生ぜず。

『東の岸に人の声勧め遣はずを聞きて、道を探ねて直に西に進む』  
と言つは、

即ち釈迦已に滅したまいて、後の人見たてまつらず、由教法有つて尋ねべきに喩う。  
即ち之を『声』のごとしと喩うるなり。

● 淨土三部經  
● 教法

『西の岸の上に人有つて喚ぶ』と言つは、即ち弥陀の願意に喩うるなり。

● 願意

「信心獲得すといふは第十八の願をこころうるなり。この願をこころうるといふは、南無阿弥陀仏のすがたをこころうるなり。」  
現前仏勅

タノメ・タスクル

東の岸に忽ちに人の勧むる声を聞く。

「仁者、但決定して此の道を探ねて行け、必ず死の難無けん。若し住まらば、即ち死せん」と。

● 忽ち

● 逆対応

自力心の延長に他力は無い

※必ず

● 必ず 仏語の必ず

「機功を責めずに、法体の阿弥陀仏を眺むれば、決信起こる」(善讓和上)  
「法の丈夫が機の丈夫」  
(雲山和上)

※光明シールド

● 撰取不捨の光明

又西の岸の上に人有つて喚ぼうと言わく、

「汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん。衆て水火の難に墮せんことを畏れざれ」と。

即ち衆生久しく生死に沈みて、眩劫より淪廻し、迷倒して自ら纏うて、解脱に由無し。  
 弥陀の悲心招喚したもうに藉つて、今二尊の意に信順して水火の二河を顧みず、念念に遺ること無く、彼の願力の道に乗ず



※煩惱が有るままでもへっちゃら

●衆て水火の難に墮せんことを畏れざれ

●水火の二河を顧みず

「安住の信機は法の威力による」

(朝日和上)

「機の本分に安住する」

(義山和上)

※ちよつとまったあ

●群賊等喚ぼうて言わく

●群賊等喚び廻す

或いは行くこと一分二分するに、東の岸に群賊等喚ぼうて言わく、「仁者廻り来れ、此の道嶮悪なり、過ぐることを得ず。必ず死せん」と疑わず。我等衆て悪心あつて相向かうこと無し」と。

※お賽銭真理教

東方の霊夢みたいな

この巫女さんも守銭奴





※あなたの言ってることは全部間違ってる

某輔教が全国的に高名な先生に向かつて言った言葉



仰いで釈迦発遣して、指えて西方に向えたもうことを蒙り、又弥陀の悲心招喚したもうに藉つて、今二尊の意に信順して

※安心の心は如来様から頂く

他力の安心（菩提心）は如来様の発遣招喚に藉つて成立する



※間違いないのは如来様だけ

「唯深く仏語を信じて専注奉行すべし。菩薩等の不相応の教を信用して、以て疑礙を為し、惑を抱きて自ら迷ひ、往生の大益を廃失すべからず。」(疏)



※安心の中で生きて

「安堵のならぬこの世界に後生ばかりは安堵させてもろうた」(喚言和上)

※安心の如来様の国へ

当来の安心

安養浄土

安楽仏国

三蔵二十九種浄土

此の人喚ぶ声を聞くと雖も亦迴顧ず、一心に直に進みて道を念じて行けば、須臾に即ち西の岸に到つて、永く諸の難を離る。

善友相見えて慶樂すること曰むこと無からんが如し。

※**仏の子は幸せ**

昭和天皇様のお言葉

「因通寺には洗心寮せんしんりょうという引揚孤児の寮がありました。

戦争孤児や引揚者の境遇を気にかけておられた昭和天皇は、佐賀県で最初の御巡幸先にここを望まれたのでした。

：

やがて陛下は引き込まれるようにして、陛下を待ち申している三人の真ん中の女の子に話しかけられました。

見ると、女の子が手にしていたのは位牌でした。

「お父さん、お母さん？」

陛下は話しかけます。

位牌は二つでした。

「はい、これが父と母です」と女の子は答ええます。

「どこで？」

「父は、ソ満国境で名誉の戦死を遂げました。

母は、引揚の途中で病のため亡くなりました」

「お淋しいっ？」

女の子は首を横に振って口元を引き締めました。

「いいえ、淋しくありません。私は仏さまの子どもですから」

陛下は少し驚いて女の子の目を見つめたが、女の子はひるまずに続けました。

「仏さまの子は父にも母にも、お浄土でもう一度会えるんです。だから父や母に会いたくなったら、私は仏さまに手を合わせます。

そして、父と母の名前を呼ぶんです。すると父も母も私のそばにやってきて、私をそつと抱いてくれるんです。私は淋しくありません。私は、仏の子です」

陛下は女の子をしばらく見つめたあと、部屋に入り右手の帽子を左手に持ち替え、空けた右手で女の子の頭をゆつくり時間をかけて撫でつつ、なおも話しかけました。

「仏の子どもはお幸せね、これからも立派に育ってくださいね」

と言うなり、畳の上に大粒の涙が一つ二つ雫れ落ちました。

(因通寺いんつうじ住職の調寛雅(しらべかんが)氏の著書「天皇さまが泣いてござった」より)

(以上 web 「戦争を語り継ぐ集い・かごしま」より)

【余論】

★造罪退失の読み方

「別解・別行・悪見人等  
妄りに見解を説きて迭いに相惑乱し、  
及び自ら(往生人〇、悪見人)  
罪を造りて退失するに喩ふ。」  
(西方指南抄訓)

1 悪見人が妄りに見解を説いて惑乱し  
それを聞いた往生人が  
自ら罪を造りて退失する

2 悪見人が妄りに見解を説いて惑乱し  
これによって悪見人は  
自ら罪を造りて退失する

「別解・別行・悪見の人等、妄に  
『(往生人が) 見解もって迭いに相惑乱し、  
及び自ら罪を造りて退失す』と、  
説きたもつに喩うるなり。」(本典訓)

3 悪見人が往生人に  
「見解もって惑乱してごんご  
自ら罪を造りて退失することになるぞ」と  
妄りに説きたもつ